

# 美濃加茂の戦い「堂洞城」

美濃を攻めようとした織田信長は、1565（永禄8）年、中濃攻略を進めます。犬山城を経て木曾川を渡り、堂洞城へ向かいました。武田氏とつながりのある東濃地方をけん制しながら、木曾川・長良川の中流域を押さえ、稲葉山城（現 岐阜市）の背後をとることができる、この地域の重要性に注目したと考えられます。

堂洞城跡は、南北に細くのびた山の頂上（標高192m）にあり、周囲の平野部との比高差は約90mになります。山頂の最も高い場所が主郭※とされ、周囲は切岸※状になっており、たしかに人の手による改変が認められるものの、比較的自然的な地形を良く残しています。また、明らかな虎口※等といった防御のための複雑な構造を見ることはできません。眺望は、北に所在する加治田)と西の夕田・羽生方面は開けていますが、他は限られており、

近隣の集落や街道などとの密接な結びつきは考えにくいようです。

これらは、加治田城を攻撃するための付城※として築かれたことに由来するのでしょうか。

美濃加茂市側から城跡へは、蜂屋町中蜂屋の伊豆神社・池奥池を経て、東西にのびる尾根伝いの街道から向かいます。その山中には、大きな凝灰角礫岩があります。これは「八畳岩」と呼ばれ、「城主の岸勘解由※たちが酒盛りをした」と伝えられています。蜂屋地域には、合戦についての様々な言い伝えが残っています。

堂洞城での戦いを伝える『信長公記』では、作者の太田牛一は実際の合戦に参加し、信長の行動を細かく記述しています。（永禄8（1565）年、9月28日条）

- ※ 主郭：城の中核となる区画。
- ※ 切岸：斜面をけずり落としてつくった人工の崖。
- ※ 虎口：城館の出入り口。
- ※ 付城：攻撃の拠点として、敵城の近くに築いた城。
- ※ 岸勘解由：戦国時代の武将。岸勘解由左衛門尉。勘解由を名乗る前は、孫四郎という。堂洞合戦で討死（1565（永禄8）年）。



主郭からみる加治田城跡方向



蜂屋から城跡へ向かう道に植樹された桜並木



主郭の曲輪



昭和40～60年代はじめ、地域住民による顕彰活動が展開された。（堂洞城顕彰委員会等）



写真右の丘陵頂上は、夕田茶臼山古墳。左奥の丘陵が堂洞城跡。（富加町夕田地区、西から撮影）



七宗町

川辺町

八百津町

可児市

みのかも文化の森

坂祝町

古井

太田

富加町

蜂屋

山之上

伊深

三和

加茂野

下米田

牧野